

人生は出会いで決まる

あなたはこの人に出会ったことがあるだろうか？

この人を知った人は人として真に生きがいのある人生を見いだす。

「彼の生涯は短かった。しかし、彼は歴史の流れを変えてしまった。それは、彼自身のいのちがあふれ出て人々の心に触れたからである」

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった」。

「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる」。

「見よ、この人だ！」

あなたはこの人を知っていますか？

人はみな影響力を持っています。ある人は、その立場のゆえに、また、その立場が保証する権威や権力のゆえに、世界の政治、経済、学術などの分野に、大きな影響を与えうるでしょう。

ある人は、その人格の高潔さ、生活態度などによって、個人の生活になんらかの影響を与えうるでしょう。

この人がもたらす影響は、人間の中心にまで及びます。影響を与えるというよりも、むしろ、根本的な変革をもたらす、といったほうが正確かもしれません。彼に出会って、人生が変わらなかった人はいないからです。

彼を個人的に知ることは、その人の生涯を決定的に変えることです。この人を知った人は、ニヒルから意味ある生涯へ、失望から希望へ、憎しみから愛へ、自己破壊から建設へ、汚れから清さへ、自己中心的生活から真に人を愛する生活へと変えられるのです。そして、そこにこそ、真の幸福があるのです。

知られていない著名人

この人は、世界的に著名でありながら、また驚くほど知られていません。ちょうどベートーベンの作品は知っていても、彼個人を知る人が少なく、マルキシズムを論じていても、マルクス個人を知らない人があるようにです。この人についてトレンチはこう言いました。「キリスト教とはキリストである」。

あなたは、「この人」（キリスト）を知っていますか？

この数年間、私はたくさんの大学に学ぶ何千もの学生に、この人がもたらす”真に豊かな人生”をわかち合うために話し続けてきました。そして、この単純な質問をくり返してきました。その結果、やはり、この人が知られていないこと、そのゆえに、人々が人生を力強く生きていないことに気づかされました。今、これを書いているのも、あなたにこの人との出会いを経験してほしいと思うからなのです。そして、私が知った喜びや確信、生きがいや希望を知ってほしいからなのです。

多くの学生が先の単純な質問に対して与えた解答は実に多種多様です。そのいくつかを列挙してみましょう。

大学生でさえ知らない

イエス・キリストとはだれですか？

彼は……

1. アメリカ人（！？）—こう答えた学生は、その答えの理由として、名まえがカタカナで書かれていたから、と答えました。
2. 道徳の教師
3. 社会改良家
4. 熱狂的示教家
5. 預言者
6. すばらしい人、善人、理想的人間
7. この2000年間に自分でも驚くほどに偉大にされた人

「キリストは神で『あった』ではありません。人々が神であると思った』にすぎません」とある哲学叢書に書いてあります。多くの人は、この文章に共鳴するようですが、私は、この人について学び、この人を知った人々の生涯の変化と、人類史上に残された彼の影響を調査した結果、この文章は次のように訂正されるべきと思っています。

「キリストは神であったのではありません。人々が神であると思ったにすぎません」とあなたも「思った」にすぎません」。

ある人、あるいは、ある事について、そうで「あった」か否かを論ずるには調査する必要があるのです。綿密な調査、検討、実証なしに、「……と思ったにすぎない」と断言するのは、その人の観念にしか「すぎない」のではないのでしょうか？

事実は理論にまさる

あるとき、ひとりのキリスト教反対者が、無神論者のインガソール博士という人と組んで、キリスト教撲滅論を書こうと決心しました。彼は数年もそのために学び、ペンをとりました。彼は、パレスチナへも飛んで研究しました。彼はこの書が世に出れば、キリスト教はもはや存在する余地がなくなるにちがいない、と豪語していました。しかし、結果的には、その書はついに出版されなかったのです。それは、彼自身がその執筆の途中でクリスチャンになってしまったからなのです。彼は、「圧倒されるような史実の前に、信じないではいられなくなった」と述べています。彼は、撲滅論をしるすことをやめて代わりの本を書きました。その本の名は「ベン・ハー」です。事実を知ることが、偏見を除き、正しい判断に至らせることは、だれでも認めていることです。

彼は確かに偉大でした

それゆえに、世界歴史は二分され、B. C. (Before Christ) 紀元前、A. D. (Anno Domini) 紀元後、と呼ばれるようになりました。このことは、彼がもたらした人類社会への影響が大きかったので、その生涯の出発点を歴史の起算点にするのがふさわしいことを、世界が暗黙裏にでも容認していることを示しています。どの百科辞典も必ず彼を載せています。彼を除いては「百科辞典」になりえないからです。

小学館発行の「日本百科辞典」でも、広い紙面を用いてしるされています。その中では、明治天皇に8分の1ページ、アレキサンダー大王に4分の1ページ、ナポレオンに2分の1ページが使われているのに比して、イエス・キリストには、1ページ全部が使われています。その項を書いておられる小林珍雄教授は次のようにその文を締めくくっておられます。

「キリスト教徒でない者でも、個人ならびに民族の歴史に、かつてこれほど大きな影響を与えた者は他にないことだけは認めないわけには、いかないであろう」。

あなたが偏見なしにこの人を見つめるならば、このことばに同意されるにちがいありません。

偉大さの秘密

ところが不思議なことには、この人の生雄を一見しただけでは、そのような影響をもたらすような要素は見当たらないのです。彼はわずかに33年半でその生涯を閉じています。（あなたが同じ年で死ぬとしたら、もう残るところわずかではありませんか？）。しかも、その中で公の活動期間はさらに短い3年半でした。（あなたの大学生生活は4年でしょう。長くても8年でしょう？彼の生涯はそれよりも短かったのです）。彼は1冊の本も書いていません。彼の言行録は「福音書」と呼ばれて新約聖書の巻頭の4冊を形成していますが、彼自らは何も書きませんでした。（幸福論－キリスト著、人生論－イエス著、というのがあったら、だぶんベストセラーになっているにちがいありません……）。彼は政治運動に参加したわけでもなく、人々が期待したような武力に訴えてのローマ帝国打倒運動のリーダーにもなりませんでした。彼の活動は、しばしば、個人に対する一見ささやかな奉仕でしかありませんでしたし、その活動の地理的範囲も非常に限定されていました。四国ぐらいの広さのあのパレスチナの中を2、3回歩き回られたにすぎないのです。

では、彼の偉大さはどこにあったのでしょうか？

ある人は、彼の偉大さはその教訓にあった、と言います。確かに、その教訓は偉大でした。

「人は、だとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損したら、何の得がありません」と述べたのはこの人でした。ひとつの人のいのちを世界よりも価値高く値積もったのはこの人です。

もし、人が単なる「物」にしかすぎないのなら、その物が物をこわしても、すなわち、どんなに大量に殺人が行なわれても、道義的な問題にはなりません。また人が単なる動物にしかすぎないのなら、アフリカの砂漠で、カモシカを、

襲うライオンに平和を要求したり、侵略反対を叫んでも何の意味もないように、戦争の不当性を叫ぶ意味もなくなります。この人は、人は「神がご自分のかたち（実質）に似せて造られた者」であると教えました。だからこそ、人は人を愛すべきであり、そのいのちは尊重されるべきだと教えたのです。あなたが「人」として扱われることを望み、物や動物のように扱ってほしくないならば、この人の教訓に同意することでしょう。

さらに、この人は、「あなたの隣人を自分と同じように愛せよ」と教え、「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です」と語りました。この愛の律法、人間関係に最も必要な教訓を、こんなにあざやかに、まとめて述べた教師がほかにいたでしょうか。

ある人は、彼の偉大さは、その模範にあると言います。

なるほどそのとおりだ、とあなたも思うでしょう。机上の空論は絵にかいたもちてあり、あまり魅力のあるものではありません。この人は自分の教訓を実践しました。公約を破り続けて恥じない人たちや、教えても実践しない人たち、議論ばかりして他人の批判や非難には実に熱心でありながら、自分の行動には責任をとろうとしない人たちは、この人の前に立つことすらていきないでしょう。

ことば 行ない そのカ

けれども、どんなによいことを教えても、どんなにその教訓を実践しても、それは、現代の私たちに具体的な助けを与えるには至りません。私たちが求めてやまないのは、もはや何かの理想でもなければ、「かくあるべき」という基準の主張でもないのです。今必要なのは、どのようにしたら、人がそのあるべき姿でありうるかを示すことなのです。そして、この人が、他のいかなる宗教家、教師、哲学者にもまさる点は、実にそれを具体化するところにあるのです。

彼は具体的に、実質的に、人の心の中に存在する妨げを破壊し、問題を解決し、生きる力を与えることができるのです。

そして、そのような、救いと呼ばれる人生体験を与えうるのは、この人が持っている特別な「実質」によるのです。人のあり方、生き方がその人の理論や行

動に先行することはいうまでもありません。（もともと、この単純な事実が忘れられ、あるいは軽視されてきたところに、現代の教育の根本的課題が存在することに気づいていないかだがたが案外多いことも事実です）。この人が、時代、人種、文化をこえて、人間に否定することのできない人格的な変化と影響をもたらしているのは、この人の実質のゆえでした。その生涯の特色、その死が持つ特別な意味、その復活の事実と、そのゆえの力が、あなたや私を根本的に変化させるものなのです。

では、“この人”の生涯の特色とは何だったのでしょうか。

第1に、彼は人となられた神でありました。

このような表現は、いわゆる常識に富んだ、教養豊かな人には、何とも荒唐無稽に見えるでしょう。しかし、彼に関する学びを、偏見なしに行なう人は、真实性を必ず認めるにちがいありません。

彼は自ら、絶対性を主張したのです。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」。

絶対性を主張されると、われわれはだいたい一種の反発を感じるものです。われわれは相対性の意識の中で生まれ、育ってきたからです。ですから「わけ登る、麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」というような歌に何か身近さを覚えるのです。しかし、そこにはもちろん絶対的なものが存在するはずはありません。

彼は絶対者の神の子、すなわち、神と同様のものであることを主張したのです。ですから、この主張がほんとうか否かを調べる意味がありましょう。

神の子はどう生きたか？

彼は、神の子として、絶対者なる神、義なる神、変わらぬ愛の神を信じており、その神との正しい関係をいつも保っていました。そこに、世の権力におもねることもなく、激動の世の中にあっても基盤を失わず、また、妥協もしなかった彼の生涯の秘密があったのです。

彼は、神であるからこそ、奇跡を行ないえませんでしたし、今でも行ないうるのです。彼が単なる昔話の中に登場する理想的人間、善人でしかなかったら、人間がどんな努力をしても解決できないで、今もなお悩んでいる人間性の問題や、罪、死などの永遠的な問題に対してなんらの解決も提供できないにちがいありません。

あなたにも奇跡が

福音書の中に、記録されている代表的な奇跡は、水をぶどう酒に変えたり、5つのパンと2匹の小魚で5,000人以上の人々に飲食させたり、病人をいやしたり、死人をよみがえらせたりしたものでありましょう。彼は、これらの奇跡は、「しるし」（証拠となる不思議な行ない、という意味で、キリストの神的特質を示すもの）であると語りました。

しかし、そのときも、今も、キリストが行なう最も大きな、また、最も意義深い奇跡は、人間の再創造、人間の根本的革命であります。罪に負け続ける人間から、力強く義のために生きる勇者がつくられるのです。絶望の沼に落ち込んでいた人をとり上げて、希望に輝く人として世界に送り出すのです。教育も、法律も、医学ももたらしえない人間改革を、この人は、今も変わらず行ない続けているのです。

第2に、彼は徹頭徹尾、真の人間でありました。

彼は、その時代の子でありました。またその国土の住人でした。その当時のことばで語り、その社会での日常生活を送りました。血肉をもった人として、疲れ、飢え、かわき、試練の中を通りました。ですから、彼はわれわれの悩みをよく知ることのできる、よき友であるのです。ただし、彼は、そのきわめて普通の人間生活を送りながらも、いくつかの全く異なった特質を持っていました。それらの特質が、歴史を、その中の個人を変え続けているのです。

真の人の特色

その第1は、彼には全く罪がなかった、ということです。

彼は人々を集めて、次のような問いを發したことがあります。「あなたがたの

うちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか」。そのときも、その後も、彼自身に罪があると言って責めることのできた人はありませんでした。クリスチャンと呼ばれる人々の罪、教会という組織体の罪、を責めることはできたとしても、この人に向かって責めることはできません。（そして、そのように責めている人々も、同じように自分にも罪があることを認めないわけにはいかないでしょう）。

彼と3年間生活を共にいた弟子ペテロは、後年書いた手紙の中で次のように言いました。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました」。

その口に偽りかなかった人！ だからこそ、今も、彼のことばには全面的な信頼を寄せることができるのです。

人は、ついつい偽りを言いますが、それだけ信頼度が減るのです。そして、「おとなとはだれか、囊切られた青年だ」という太宰のことばに共感を感じざるを得なくなるのです。

この人の前に立つとき、だれも自分が罪人であることを否定できなくなります。絶対の基準を失って不安定な自分、思いとことば、ことばと行ないの中での不一致や矛盾に満ちている自分、そして、その結果、願っているのでもないのに悪の道へ踏み込んで行く自分を、見つめさせられるのです。

真の人であったキリストの第2の特色は、彼が、ほんとうの愛に生きた人であったことです。ある律法学者が、律法の中でいちばんたいせつな戒めは何か、と問いかけたとき、この人は次のように答えました。

「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」これがたいせつな第一の戒めです。「あなたの隣人を自分と同じように愛せよ」という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです」。

さらに、彼はこうも教えました。「人がその友のためにいのちを捨てるというこれよりも大きな愛はだれも持っていません」。この人は愛を教えました。しかも彼は、自ら教えたその愛を実践したのです。この人は、自分のもとに来るすべての人の求めに応じ、さらに、自ら進んで人々に近づき、その人々が必要といている助けを惜しみなく与えたのです。

A - マックラーレンは、「愛とは、愛する対象者が到達しうる最高の祝福に至ることを願い、そこに至ったとき、それを喜ぶ心である」と述べていますが、この人の愛は、まさに、それであり、それ以上でした。

この人の愛は理解する愛でした。彼はあなたをいちばんよく知っています。この人の愛は、思いやる心でした。彼はあなたとともに喜び、悲しまれるのです。この人の愛は、人をそのまま受け入れる愛です。その愛を知って初めて、人は安息し、愛されている満足を見いだすことができるのです。

愛は黙ってはいない

この人はその純粋な愛のゆえに、人の幸福を破壊する問題、しかも、どんな人も決して解決できない二つの問題にいのちをかけて取り組んだのです。その二つの問題とは、人間の罪と、その結果としての死とその後のさばきです。

聖書は、「すべての人は罪を犯した」と言い、「罪から来る報酬は死です」と宣言しています。そして、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」と、警告しているのです。

人間の惨状

いったい、この罪と死という二つの事実と、それらがもたらす人生の悩みや悲しみを無視しうる人があるのでしょうか？ちょっと考えてみてください

人が人を殺し、文明を破壊する戦争の悲惨と残虐。毒ガス、細菌、核爆弾など、近代戦の武器による損傷は想像を絶します。極端にまで腐敗した人間性のしわざでなくて何でしょう。

人々を悩まし続けている一連の公害の理由は何でしょう。企業家のどん欲や、政治家の無責任と無策に関係がないとはだれも言えないでしょう。

学園を吹き荒れた紛争、闘争——それによって破壊された人間関係はいつ回復されるのでしょうか。学校当局にも、政府の教育担当官にも、学生にも、それぞれいくばくかの責任があったと考えられますが、自分の非は棚に上げて、相手だけを攻撃する自己中心性は、共通の罪でしょう。

現在の学生が批判し、非難し、ときには攻撃しているあの「おとなたち」の姿

が、30年後の自分の姿でしかないことに気づいていないとしたら、解決への道はまだ開かれてはいないのです。

平和のための真剣な努力。正義を明示する教育、不当な行ないに対する法の制裁——どれもが、人間性の根本的なゆがみ、罪のひずみには何の解決も提供してはいないのです。さらに、人の生涯は死によって閉じられます。すべての人は必ず死にます。その死が、いつ来るか、だれも知りません。死が来たら、それをとどめる力はどこにもありません。そのとき、その人にかかわるいっさいの可能性は消え去るのです。嘆くことはできても、彼を生かすことはもうできないのです。そして、死のかなたには、聖く（きよく）、義しい（ただしい）神のさばきがあるのです。人の力では解決できない、この二つの問題に、正面から取り組んだのが、この人でした。

“この人”こそ解決者だ

この人は、人間から罪と死が除かれなかったら、真の幸福はありえないことをよく知っていました。そして、その解決のために、罪のないただひとり人間であった彼自身が、罪そのものの解決のために、身代わりに神のさばきを受ける以外に道がないことも知っていました。十字架上で彼の死は、人の罪の身代わりとなって、神のさばきを受けたこの人の愛の最高のあらわれでした。その血潮がしたたる十字架を眼前にしていた弟子のひとりが、後にこのように、書きました。

「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです」。

あの悲惨な十字架の死はあなたの罪のためであり、私の罪のためでした。

十字架—いったいなぜ？

あの朝、この人は、ローマの総督ピラトの法廷でさばかれました。ピラトはこの人の無実を知っていましたから、彼を訴えたユダヤ人からこの人を助けようとはしました。しかし、キリストをねたんでいた人々は群衆を扇動して、「十字架につける!! 十字架につける!!」と騒ぎ立てたのです。

この人の第一義的な関心が物質的繁栄ではなくて、人の心と永遠の神の国にあることを知り失望して裏切ったと思われるユダ、またこの人の成功をねたんだ当時の宗教界の指導者たち、またこの人から受けた恩をみな忘れ、扇動されて騒いだ群衆。さらに人の顔を恐れて、ローマ法さえも無視した勇気のない、臆病裁判官と化したピラト、こんな人々がいたので、この人は、十字架につけられたのです。表面的にはそうでした。けれどむこの人は自らの義と愛のゆえに、あなたの罪、私の罪をゆるすために、進んでこの特別な死を受けたのです。

あなたのために！

あとき、もし、私たちが、あのゴルゴタの丘に行ったら、この人の手足に打ち込まれた大きなくぎの音を聞いたことでしょうか。ガツン！ガツン！と、響くあの音。あのかぎは、本来私たちの手足に打ち込まれるべきものでした。私たちの手は汚れています。悪いことをしてきた手です。私たちの足も汚れています。行ってはならないところへ行った足です。ですから本来、罪の罰を受けるのは、私たちの手足のはずでした。この人の手は、いつも病める者に差し伸べられて、その人々をいやした手です。悲しむ人の涙をぬぐい去り、倒れた人を助け起こしたのもその手でした。悩む者をたずねて、この人の足は石ころ道を歩いて行ったのです。絶望のただ中で、彼の来訪を受けた人は、ほこりと土によごれたこの人の足を美しいものと見たにちがいありません。それなのに、その清らかな手、その美しい足が、私たちの手足の代わりに、あの十字架にくぎづけられたのです。

苦悩の中に光る愛

この人がつけられた十字架は、起こされて、掘られてあった穴の中に、ドスン！と落とし込まれました。全身の重みが、手足にかかります。激しい痛み、苦しみ。そのただ中で、この人は、自分のまわりの人々をじっと見つめました。そして、こう言われたのです。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ここに、すべての罪がゆるされうる根拠、また、理由があるのです）。このようなゆるしの愛に、あなたはふれたことがあるでしょうか？

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです上

「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんで

した。…そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです」。
そうです！私もあなたも、自分を縛っている罪から離れて、義のために生きることができるのです。

どんな理論や説教も、またとんなにすばらしい模範も、人の心を罪の暗やみから解放することはできません。ただ、この人の十字架の死と、復活の事実だけが、人を罪とその結果としての死から救うのです。

この人は、あの十字架の上でなくなりました。そして、罪のゆるしを宣言しました。そして、3日目に、自ら預言したようによみがえりよした。この人は、今、霊の世界に実在し、彼を求め、信じ、受け入れるすべての人の心に住んで、その人を新しくつくり変えるのです。

彼との出会い

だからこそ、現在でも私たちは、この人に出会うことができるのです。そして、彼を心の中に迎え入れるとき、今まで知らなかった新しい人生を体験し始めるのです。

彼はこう語りました。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」

事実、彼に従って人生を歩む者は、それまでの人生の暗やみから解放されます。かつては心に重くのしかかっていた、あのむなしさ、虚無の暗やみは消えてゆきます。孤独のやみも、愛と喜びの光のもとに姿を消し去ります。人をねたみ、また恨み、もんもんとしていた心の中にうずまいていた汚れも流れ去ります。

どうすればよいのか

ここで、問題になるのは、「従って歩む」ということの実際的な内容です。多くのかたは、それは、彼の教訓を学び、できるだけ、その教えに従って努力することだと考えています。しかし、そのようにしてみた人はみな、彼の教訓は、実践できないもの、高すぎて努力だけでは到達できない規準であることに気づくはずで

それでは、どうすればよいのでしょうか。それは、イエス・キリストを、昔物語りに存在した過去の一人物とするのではなく、復活して、今現実に生きておられる人格的存在として心の中に信じ受け入れればよいのです。そこに、この人との人格的出会いがあるのです。

ある人について知ることと、その人を個人的に知ることでは、全然ちがいます。この人についての知識は書物から得ることができますが、この人との人格的な出会いは信頼による人格体験以外には起こりません。

信じる、ということは思い込む（しかも事実反して）ことではありません。信じるとは、理解し、肯定し、心から信頼し、従うことなのです。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるならわたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」とこの人は約束しています。

あなたができること

彼は、今、あなたの心の戸の外に立って、たたいているのです。あなたは、この人に対して三つの応答をすることができます。

一つは、ただ黙っていることです。彼は、あなたの心の戸をたたき続けますが、決してあなたの意志を押しつぶしてまで、心の中には入り込みはしません。

二つは、はっきりことわることです。もっとも、ことわっても、彼の愛による招きも、新しい生活へのすすめのことばも変わりません。彼のノックの音は変わらずに聞こえることでしょう。

三つは、「どうぞ、私の心にはいってください。過去のいっさいの罪をゆるし、永遠のいのちを与え、豊かな人生を歩めるようにしてください」と言って、この人を心の王座に迎えることです。そのとき、彼は、あの約束どおりに、あなたの心の中に住んで、新しい人生をあなたの中で始めてくださるのです。

罪がゆるされたことによってもたらされる心の平安、愛されていることの発見とそのゆえの喜び、義のために雄々しく進む勇氣と力、どんなことに直面してもくじけず、神の支配を信じて意欲をもって生きる、希望ある人生が、あなた

の中で、そのとき始まるのです。

キリストをさばいたあのローマの裁判官ピラトは、「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしようか」と問いましたが、この問いは、そのまま、あなたの問いでもあります。

この人を、自分の生涯から抹殺して、今までと少しも変わらずに罪の中に生きるか、この人を自分の心の中に迎え入れて、彼が約束された新しい生涯に踏み出すか——その決断はあなたのものです。

あなたが、この人を信じ、受け入れて、真に豊かな人生を自分のものとし、喜びと愛をもって、だれかのために生きる人になられるようにと祈っています。

人生は1回しかありません。その一生の一時点でなしうることも一つしかありません。その継続が人生をつくります。多くのことができるように思えながら、一つしかできないのですから、選ばなければなりません。その選択があなたの方向を決定します。選択の原則は、選ぶことは自由ですが、選んだ結果はもう選べない、ということです。

あなたはこの小冊子を読まれたあとで、何かの選択、何かの決断をなさるので、どうぞ真剣に人生と永遠を考えて、よい選択と決断をなさるように、心から祈っています。